
ピータバロ

M i c h e l

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ピータバロ

【コード】

N1868E

【作者名】

Michael

【あらすじ】

ピータバロ、それはイギリスの小都市の名前。17歳の誕生日をま近にした、売れない画家のキース・L・ヴァンベルトの前に突然現れた、可愛いがおそろしく小生意気な小学生の女の子。「この絵いいわね。私を買ったげる」彼女がキースに支払った金額は何と250ポンド（約5万8千円）貰いすぎたお金を返すため、キースは彼女を追って、名門校ピータバロ・シティ・アカデミアに潜入するのだが…

ピータバロ

ロンドンから鉄道にのって北に約1時間。
小都市、ピーターバロ。

ゴシック様式の大聖堂と、美術館。それに続く小道に点々と出された無名画家たちの露店。

その中の一つで - キース・L・ヴァンベルト - は、冴えない顔つきで小麦色の髪をかきあげ、恨めしげに通り過ぎてゆく人々に目をやった。

いつかあの豪勢な美術館に、自分の絵が飾れたら。そんな思いで田舎を飛び出してこの町にやって来たはよかったが……、

一枚の絵だって売れやしない。こんなんじゃ、絵具代どころか今日の飯代だって危ういぞ。 そういえば、昨日、食った飯は何だった？ 売れ残りまぎわの干しパンか？

「お前にもろくなもん、食わしてやってないな」

キースは、彼のそばに寝転んでいる彼の相棒 - 雑種犬 -

の毛並みをくしゃくしゃつしゃつとなぜた。中型だが、茶色と白の模様はなかなかいいコントラストをしている。それに垂れ下がった茶色の大きな耳が、けっこう可愛い。

「明日は俺の17回目の誕生日なんだぞ。こんなんじゃ、ケーキの一欠片も食べれやしない」

寂しげに遠くを見やる。すると、

小道の向こうから黒髪をなびかせて歩いてくる少女が目に入ってきた。えんじ色のブレザーに白いリボン。胸には鳥のつくみをデザインしたエンブレム。それは、このあたりでも裕福な家の子息、令嬢が通う寄宿舎制の学舎、ピーターバロ・シティ・アカデミアの制

服に間違いなかった。

今にも鳴り出しそうなすきつ腹をかかえた青年に、ふと気がつく
と、少女は小生意気な目を瞬かせて、露店に近づいてきた。

少女は1枚の風景画を指差し言う。

「これ、いい絵じゃないの。描いたのはあなた？」

アイドル並みの可愛さで、笑顔を作る。けれど、態度は傲慢だ。

「この店に並べた絵はみんな、俺の描いたもんだよ」

多少、むっとした声音でキースは質問に答えた。

「夜のカフェテリア、この店を照らした街灯の黄色が暖かくていい
感じよ。季節は5月ね。どう、当たっているでしょう？」

「へえ……」

少女の言葉に、キースは初めて表情を和らげ笑顔を作った。

「よくわかるな。お前、まだ小学生くらいなのに、見る目があるじやないか」

「あなたの隣にいるその犬の名前だってわかるわよ」

「こいつの？」

「ええ、その毛並みとずんぐりした体型、名前はパトラッシュ！」
キースはその答えに天を仰いだ。

フランダーズの犬かよ！？俺はまだ、そこまで貧しくねえよ。

それが、この青年 - キース・L・ヴァンベルト - が、絵画窃盗団“ピーターバロ”にかかわった第一歩だったのだ。

ピーターバロ

大聖堂の鐘楼から、午後4時を告げる鐘の音が響いてきた。

「あ、忘れてたわ。4時まで学校に戻らないといけなかったのよ」
そういうわりには、少女はあせる様子もなく、まだキースの描い

た絵をあれやこれやと物色している。

「お前、あの金持ち学校のお嬢様なんだろ。こんな薄汚い露店で道草なんか食ってたら、先生に叱られるぞ」

場違いな奴は、とつと何処かへ行つちまえ！

苦々しい気持ちを抑えるように油壺に絵筆をつっこみ、キースはそれをじゃばじゃばと洗い出した。……と、その時また、少女が声をかけてきた。最初に見かけた風景画を指差して言う。

「この絵、見れば見るほどいい絵よね。だから、私が買ったげる。いくらで売ってくれるの？」

「……買ったげるって、ふざけんなよ。いくら俺だって、小学生の小遣い程度じゃ大事な絵は売らないんだぞ」

ふうんと少女は少し考え込むようにして、ポケットから花模様の財布を取り出した。いかにも少女趣味なデザインのそれから、ごそごそと“お小遣い”を引つ張り出して言う。

「これで手を打つてよ」

「えっ、ちよ、ちよつと待ってくれよっ！」

キースの手に代金を握らすと、少女は目にも止まらぬ早さで風景画を抱え込み、学校の方へ走り去ってしまった。

ひい、ふう、みい……えっ？50ポンド紙幣が5枚？！って250ポンド……！

（*注、250ポンドは約5万8千円（変動ありですが……））

「おいっ、待てよ！ガキからこんなにもらったら、俺が先生に怒られるだろっ……！」

だが、少女の姿はすでに街路樹の向こうに消え去った後だった。

何て子供だ……お金の値打ちが分かってんのか？俺の絵にほんと250ポンド？

“この絵って見れば見るほど、いい絵よね”

それでも、少女のその台詞は妙に自信に満ちていて、キースはまんざらでもない気分だった。

駄目駄目っ！きつと、後からあいつの学校の先生がやってきて、うちの生徒をカツアゲしたとか何とか言われるに決まってるんだ。早めに返しておいた方が身のためだぞ。

“絶対、その方がいい”と、大急ぎで店を片付け、キースはそばにまどろんでいた雑種犬に目を向けた。

そういえば、こいつの名前……まだ、決めていない。ああ、もうこの際、何でもいいか！

「一人は何だか不安なんだ。お前も一緒に来てくれ！……パトラッシュー！」

そして、キースはパトラッシュを連れて、少女の学校、“ピーターバロ・シティ・アカデミア”へ大急ぎで駆けていった。

“ピーターバロ・シティ・アカデミア”

繊細な彫刻をほどこした石柱。建物の正面であるファサードの上には煌びやかなステンドグラスがはめこまれている。

「本当に、ムカつく建物だよなっ」

学校というより聖堂といった風の校門の前で、キースはちえつと舌を鳴らした。

髪はバサバサ、油絵具で汚れた上着に破れたGパン。どう見たっ

て、自分はこんな場所にはそぐわない。

あの女の子を追いかけて、来ちまったけど……もらった絵の代金が多すぎたから返します。なんて言ったら、ますます怪しい奴だと思われないか？

はあ……と、ため息をもらし、足元にいるパトラッシュに目をやる。その時だった。

「よかった！間に合ったのね。もうあきらめてたのに！」
不意に聞こえてきた声に、キースは驚いて後ろを振り返った。

キャメルのスーツを着こなした、長身の美女。
ショートカットのブルネット。眼鏡の向こうの知的な瞳。

美女は、目の前の青年をはたと見つめなおす。そして、少し気を落した風にこう言った。

「違うわね……、どう見てもその格好は、うちの美術学院の生徒とは思えないわ……で、あなた、この学校に何か用？」

どうやら、この美女はシティ・アカデミアの女教師のようなのだ。訝しげな彼女の物言いにムカつきながらも、この際だ。と、キースはポケットに突っ込んであった250ポンドを無造作に差し出した。
「これ、お宅の生徒が俺の絵と引き換えに置いてったんだ。でも、俺の絵はこんな高値で売られるような絵じゃないんだよ！あんた、この先生？金持ちのご令嬢かなんか知らないが、もつと生徒に金の値打ちをきっちり教えた方がいいんじゃないのか」

「あなたの絵を？うちの生徒が？」
一寸、間をおいてから、その美女はふつと意味深な笑みを浮かべて言った。

「という事は、あなた、絵描きなのね。なら、聖堂美術館に行ったことはある？あそこの展示物には詳しい？」

“ 聖堂美術館 ”

それは、ピーターバロ大聖堂に隣接したこの都市で唯一の美術館だ。いつか、あそこに自分の絵が飾れたら……それが、キースの夢なのだ。

「……そりゃあ、一通りの絵は全部見てまわってるけど……特に、今、特別展示されてる“ 神秘の降誕 ” はもう7度も見た」

「 “ 神秘の降誕 ” ！あの絵が好きなの？そう！おあつらえ向きじゃない。なら、私と一緒に来て！」

美女はそう言うと、キースの腕を引つ張った。有無をいわず、彼を学校の門の中へ引き入れようとする。

「ち、ちよつと、待ってくれよ！俺を何処へつれてゆくんだよ！？」
あわてふためくキースをまるきり無視して、彼女は笑った。

「頼んでいた美術学院の生徒が間に合わないみたいなの。だから、アルバイトさせてあげる」

仕事は、子供たちの絵画鑑賞ガイド。

場所は聖堂美術館。

「報酬は250ポンドでどう？」

また、250ポンドかよ！この学校って生徒も先生も一体、どうなつちまつてんだ？！

「おい、待てよっ！俺はまだYESとは言ってない！」

「なら、今、YESと言いなさい」

一旦開いた“ ピーターバロ・シティ・アカデミア ” の校門が、再び閉じられてゆく。校門の外に中型犬を一匹、取り残して。

すわ、相棒の一大事？！

そう思ったかどうかは微妙だが……それでも、キースの相棒、名犬？パトラツシユは、クンクン鼻を鳴らしながらその建物の裏手に向かっておもむろに駆け出した。

結局、鑑賞ガイドとやらのアルバイトを引き受けるはめになっちまった。

聖堂美術館の展示室の入口で、キースは深くため息をついた。

“でも、その格好じゃねえ……ここにうちの美術学院の制服があるから、とりあえずそれに着替えて”

ブルネットの女教師から渡された、着替えは、“ゆるゆる”で“だぶだぶ”だ。

他のサイズはなかったのかよ！この格好の方が前よりよっぽど、変じゃないか。

ぞろぞろと後をついてくる、お坊ちゃん、お嬢ちゃん面をした生徒たちに目を向けて、キースは半ばやけくそで、正面に展示された一枚の宗教画の説明を始めた。

「“受胎告知”……数多くの画家によって色々な作品が描かれているが、これは「マタイによる福音書」の記述を元に描かれた1枚で、天使ガブリエルが降臨し、精霊によりマリアがキリストを身ごもった事を告げる場面を描いたものだ」

すると、お坊ちゃんの一人がこう言った。

「そんな事、聞かなくても知ってるよ。ガイドならもうちょっと、気のきいた事を教えてくれないかなあ」

何て、クソ生意気な子供なんだ。

「なら、どんな説明ならお気に召すんだよっ！」

じろりとにらみつけた目の先に、さきほど露店に来た女の子を見つけてキースはあつと声をたてた。

「お前っ、いつの間にも列に入ってたんだ？さっきまではいなかったのに」

女の子は、訝しげにキースを見やる。

「お兄さん、ここの学校の生徒じゃないでしょ？こんなところで何やってんの？貧乏が過ぎて偽装アルバイト？」

すると、小生意気な坊ちゃん口をはさんできた。

「何だ？こいつってミリーの知り合い？」

「うっん、単なる“通りすがり”の売れない画家よ」

可愛い表情から、繰り出される辛らつな言葉。キースはあきれかえって、もう怒る気にもなれなかった。少女が抱えている白い包みを見て、彼は言う。

「お前、ミリーって名前なのか？その手に抱えている大荷物は何だ？美術鑑賞にそんなもん必要ないだろう？」

四角い形……絵か何かか？

「ミルドレッドよ。みんなはミリーって呼んでるけど。この荷物は……気にしない、気にしない。それより、“受胎告知”の隣にある“風景画”の説明をしてよ。この絵の方がずっと、私は気に入ってるんだから」

「“風景画”？でも、これってたいして名もない普通の画家が描いた模写だぞ」

キースは解せない表情でミリーを見返した。

「いいの！みんなも集まって〜！お兄さんの説明を聞きましょー！」

ミリーの一声で、列になっていた生徒たちが我先に“風景画”の元に集まってきた。

青と白と黒を複雑にからみあわせた夜空に黄色い星が見え隠れした、ちよつと変わったタッチの絵。

「ち、ちよつと待てよ。この絵より、あつちに展示してある“神秘の降誕”！ほら、せつかく聖堂美術館に来たんだから、あれをまず見なきゃ駄目だろっ」

何をおいても、ここの展示物のメインはやっぱり、“神秘の降誕”じゃないのか？

こいつら一体、どうなつてんだ？確かにこの絵は俺も好きだが、説明なんてよく知らないぞ。

「いいのよ。あの絵はレイチエルが見てくれるから」

ミリーは意味深な笑みを浮べると、“神秘の降誕”を見学する人垣の後ろに立つて、彼らたちの方を見ていた、ブルネットの女教師を指差した。

レイチエル - 美人で長身の女教師 - は、キースと目が合うと、にこやかに微笑んだ。

その直後に

ジリリリリリッ！！

警報が鳴った。

そして、聖堂美術館の明かりという明かりが、すべて消えてしまったのだ！

ピータバロ

「皆さん、落ち着いて！大丈夫です。その位置を動かさないで！明かりはすぐにつきますから」

警備員たちの声が、広い館内にこだまする。すぐに懐中電灯を手にした数名が、あせった様子で“神秘の降誕”ブースに駆けていった。

ざわざわと不安げな人々の囁き。

停電？でも、何で警報が鳴ったんだ。

“絵”……まさか、“神秘の降誕”を狙って？！

そういえば、こここのところ、頻繁に新聞を賑している名画を狙った盗難事件。

キースの脳裏に、そんな事が浮かんだ時、ぱっと館内の照明が点灯した。

どきどきした気分で、絵の展示スペースに目をやる。

「大丈夫だ！絵は無事です」

思わずあげた警備員の声に、客たちは一斉に“神秘の降誕”に目を向け、ほっと息をついた。

なあんだ。無事だったのか

ちょっと期待をはずされて、キースは苦い笑いを浮かべた。絵画泥棒の現場に居合わせたなんて話が本当なら、絵描き仲間の中ではかなりの自慢になるのにな。

「さあ、電気もついたら、みんな、もう帰りましょ」

いつの間にかキースを差し置き、生徒たちを先導しはじめたミリィが言った。

「ち、ちょっと待て。まだ、ほとんど“絵”らしい“絵”は見えてないだろ？」

「いいのよ。もう飽きちゃった」

「おいっ！」

キースを残して、とつとと館を出てゆく生徒の一団。あせって、女教師レイチエルの方を見てみると……涼しい顔で彼らの後をついてゆくではないか。

鑑賞ガイドって……そりゃあ、こんなんで250ポンドももらえるなら、ぼろいアルバイトだけど……

こいつら……うさん臭すぎるぞ！

はあ……とため息をついて、先ほどまでミリーたちが見ていた“無名画家の風景画”に目をやった。その瞬間、

何いイイ！！

キースは、あまりの驚きで心臓が口から飛び出しそうな気分になった。

「俺の絵……！」

“無名画家の風景画”はそこにはなかった。その位置にあったのは、露店でミリーが250ポンドで買っていった、

“キースの風景画”だったのだ。

ピータバロ

「な、何で俺の絵がこんな所に!？」

まさに、晴天の霹靂。キースはどきどきと辺りを見渡した。

“神秘の降誕”の方に気をとられて、ま、まだ、誰も気づいてないみたいだ。

警備員がやってくる前に、早く出て行かないと、ヤバい……。

あまり急ぎすぎても、不自然かもしれない。そろりそろりと忍び足で展示ホールを後にする。こんな状況の中に、自分の大事な作品を置いてゆくのは忍びなかった。けれども、

ごめん。俺の絵！

出口あたりで、キースは、もう1度、自分の風景画に目をやり、それから脱兎のごとく駆け出した。

* * * * *

翌朝、大聖堂に近いカフェテラスで、広げた新聞にすっぽり顔を隠しながら、キースはコーヒースをすすっていた。

ミラーがキースに支払った250ポンドは返してしまっただし、バイト料ももらえぬままに帰ってきて、結局、財布の中身は寒いままだ。

とんでもない、誕生日。そう、今日はキースの17回目の誕生日、でも、もうそんな事はどうでもよくなってしまっていた。

「聖堂美術館ですりかえられた謎の風景画。作者は誰……」

声を殺して、そばに座っているパトラッシュに新聞の内容を読み上げる。

「昨日、聖堂美術館で盗まれたとみられる複製画の後に残されてい

た、作者不詳の風景画に注目が集まっている。捜査本部は、“何故犯人が、複製画を狙ったのか”という疑問とともに、この残された風景画が事件解決の重要な鍵を握っているとの認識を深め……ああ、本当にこれは、マジにヤバイ」

あの絵の作者って……一番の容疑者は俺か？

「どうしよう、どうしたらいいんだ？パトラッシュ」

犬に相談したって面倒みってくれるわけでもないが、とりあえず、そう言ってみた。だって、このままだと本当にフランダースの犬みたく、悲劇の最後を迎えてしまいそうだし。

すると、その時

くわんっ！

と、パトラッシュが一声ないで、キースの膝元を口で噛んで引っ張った。

「え？」

くわんっ！

何だ？俺と一緒に来いって言ってるのか

キースがその言葉を声にする前に、パトラッシュはもう走り出していった。

「ちよ、ちよつと、待てよ！」

駆けてゆく1匹と一人。その行き先は……

ピーターバロ・シティ・アカデミア。

“僕は見つけたんだよ。

すべての謎はそこにある！”

と、パトラッシュが言ったかどうかは、定かではない。

それでも、この17歳の誕生日に、キースの運命の輪は、確実に違う方向に回りだしていたのだった。

「パトラッシュ、ここって、あの学校の裏じゃないか？」

延々と続く赤レンガの壁。裏手といっても、ピーターバロ・シテイ・アカデミアの建物は豪華の一言につきる。だが、キースは鼻先に感じたかすかな香りに、おや？と顔をしかめた。油絵具の臭い？

彼にとつては、おなじみの香りが壁の向こうから流れてくる。その時、横にいたパトラッシュが、前足でレンガ壁をぼかんと殴ったのだ。（少なくともキースにはそう思えた）すると、あるうことが、壁の一部がいつも簡単に崩れ落ちたではないか。

「おいっ！壁を壊すなよっ」

そう言ってみたものの、キースは、まじまじと目の前に都合よく出来上がった“出入口……”のような穴を見つめた。

この豪華な建物の壁が犬のパンチごときで壊れるわけがないじゃないか。

この建物、あの先生、そしてクソ生意気な生徒！何もかもが怪しすぎるぞ……畜生！おまけに、わざとらしく作られたこの穴は、何なんだよ？

パトラッシュのくるくるした瞳が、キースに語りかけてくる。

“行こう！真実を見つけたら、きっと何かが変わるから”

見えない系にひかれるように、キースとパトラッシュはレンガ壁の穴を通り、学校の敷地内へと入り込んでいった。入ってすぐの場所に、これがまた、下りてください。とばかりに備えられた“地下への階段”が見えてきた。

「行くよ、行きゃあいんだろうが」

半ばやけくそになって、キースはパトラッシュを伴い、その階段を下りていった。

地下室……？

先ほど嗅いだ、油絵具の香りが漂ってくる。そして、その部屋の扉を開いた時、

「この部屋！……一体、何なんだよ！？」

部屋の中の壁という壁……どちらを見ても、絵、絵、絵！

相当な広さがあるにもかかわらず、地下室の部屋の壁にはおびただしい数の絵画が、掛けられている。

おずおずと部屋に入ると、キースは壁に掛かった絵に目をやった。「ピカソのサインがある……こっちは、ゴッホ？でも、これは……」

また、つんと鼻についてきた油絵具の香り。

キースははっと、目を見開き、部屋中に掛けられた絵をぐるりと見渡した。

古い絵から、こんなに油絵具の香りがするものか……。という事

は、

「贋作！この絵、全部、偽物か！？」

「失礼ね。ちゃんと本物も混じっているわよ」

その時、部屋の扉の向こうから、響いてきたアルトな声。

女教師、レイチエル。

髪と同じの褐色の瞳が、眼鏡の向こうで意味深に微笑んでいる。

「ピーターバロ・シテイ・アカデミアにようこそ。ミリーの気まぐれのおかげで、あなたに会えて本当に良かった」

キースは、怪訝な顔でこう言った。

「会えて良かった？俺はただの売れない絵描きだぞ。あんたの台詞の意味がさっぱりわからない」

すると、レイチエルはにこやかに答えた。

「ミリーがすり替えたあなたの風景画、えらく評判になっているわよ。名うての画商が、どうしても手に入りたいと続々手をあげている。目下の時価は13,000ポンド」

「え？13,000……」 *注 13,000ポンドは約300万円

「もちろん、闇での取引だけど。だって、もうプレミア付きだもの。反響の大きさに警察が犯人逮捕の手がかりになるって、あなたの絵、あのまま聖堂美術館に展示される事になったのよ」

そう言っつて、レイチエルはタブロイド版の新聞をキースに差し出した。

“ 評判の謎の風景画、聖堂美術館に展示を続行！ ”

作者は天才？はたまた、美術窃盗団か！

ピーターバロ

「……で、物は相談だけど」

驚いて二の句がつけないキースに、女教師は有無を言わず提案する。

「あなた、ここで絵を描かない？超豪華なアトリエを用意するわ。契約しましょう。ピーターバロ・シティ・アカデミアの専属画家として」

何だか頭の中が真っ白になってしまった。

俺の絵が13、000ポンド？聖堂美術館に展示？……おまけに専属画家？

その時、

くわんつ。

パトラッシュユが一声、鳴いた。

すると、飛び出してしまったキースの心が、やっと体の中にもどってきた。ふうと息を吐き出してみる。騙されるもんか、こいつら口くな奴らじゃない。

「契約とかより、聖堂美術館の絵を盗んだのはお前たちだな。まず、その事を説明しろよ。何故、“神秘の降誕”を狙わずに“複製画”を盗んだ？それに、俺の絵とすり替えたのはどういう理由だ？！」

レイチエルは、淡々とした態度を崩さない。

「絵のすり替えは、単なるミリーの気まぐれだって言ったでしょ。それにね、あれは“複製画”なんかじゃない。れっきとした有名画家が描いた本物の絵よ。それもね、自殺したその画家が死の1日前に描いた最後の作品。あの絵の空の青を見た？絶望の色がキャンパスの中に色濃く立ち込めているじゃない。それなのに、作品の中に使われた唯一の黄色はわずかの希望を求めるように明るく輝いて

いる。あの絵は、本当の価値もわからない馬鹿な収集家たちが、バブルの泡に乗せられて買いあさった数々の美術品、その中に混ざり込んでいた逸品。“神秘の降誕”なんかより、ずっと優れた作品なのよ」

「……」

言葉が出せないキースにたたみかけるように、女教師は言う。

「私たちの目的は、そんな隠れた作品を探し出して、本当の価値でこの世に送り出す事。もちろん、あなたのような埋もれてしまっている才能を見出す事もその一つよ」

「……なら、きちんと競売にでも出て、買い取ってしまえばいいじゃないか！盗む必要なんかないだろ?!」

ほほ……とレイチエルは挑戦的な笑みを浮かべた。

「そんなの、ちっとも儲からないじゃない。ここのご子息、ご令嬢の親にも、かなり有名な画商が沢山いるの。欲しい物には手段を選ばない収集家もね、ただし、彼らの目は本物。ミリーなんかその一人。あの審美眼には驚いたわ。あなたの才能をちゃんと見極めたんだから」

何だよ、それ?! うまい事言っても、結局は金が欲しくて絵を盗んでる窃盗グループじゃないかよ。おまけに生徒たちまで巻き込んでの俗悪集団じゃないか。

「契約なんかお断りだ! どうせ、あそこに掛けてある贋作作りを手伝わせようって腹なんだろ。誰がそんな犯罪の片棒を担ぐものか!」
怒りにまかせて、そうは言ったものの、相手は犯罪集団だ。キースはかなり不安になった。

俺、ちゃんと家に帰れるのか。簀巻きにされて、テムズ川に放り込まれちゃうんじゃないのか……。

ところが、

「それは、残念。なら、お帰りはきちんと正門から出て。穴のあいだ裏門から、小汚い男が出てゆくなんで、それこそ警察に怪しまれかねないから」

レイチエルは実にあっさり、そう言った。

訝しげに部屋を出てゆくキースとパトラッシュ。その背中越しに聞こえてきたレイチエルの声。

「言っておきますけどね。あなたはもう第一容疑者なのよ。今の話を誰にしたって疑われるのはあなたなの」

この女、超ム力つく！キースは、その気持ちをたたきつけるように、力まかせに部屋のドアをボタンと閉めた。

「気がかわったら何時でも、どうぞ」

ドアの向こうから響いてくる高らかな笑い声。畜生！馬鹿にしやがって。それでも、今の自分に何ができる？なす術のない悔しさに、キースはわざと靴音を大きくたてながら、地下室から正面玄関へと続く階段を駆け上がった。いった。

くわん、くわんっ！

ちよっと待てよと、言いたげにパトラッシュが、その後を追う。

ちよつど、キースがホールから正面玄関に出ようとしたその時、

「あつ、パトラッシュ！鑑賞ガイドもいる」

見たことのある生徒の集団が、彼らを見つけてわらわらと集まってきた。その先頭にいるのは、キースの風景画を250ポンドで買った……

ミルドレッド……通称ミリー。

ピータバロ

「お兄さん、レイチエルに会った？シティ・アカデミアと契約した

「？」
万遍の笑みを浮かべて言う少女に、キースはあからさまに嫌な表情をする。

「そんなもん知るか」

「……」

一瞬の沈黙。するとあるう事が、ミリーがぼろぼろと涙が流し出したではないか。

「やっぱりね。でも、お願い、この学院に来て。生徒だけじゃ、駄目なの。私たち、この学院を変えたいの」

突然の事でキースには何がどうなっているのか、さっぱりわからない。すると、別の生徒が言った。

「日の目を見ない作品や作家を世の中に出す。それには、僕らも賛成なんだ。みんなが見たい作品を一人で買占めたがる業突く張りな収集家からは、盗んじやつてもいいとまで思ってる。でも……」

また、別の生徒が言う。

「レイチエルたちみたいに、金儲けのために作品を集めるのは嫌だ。けどね、実際に僕らの目的にはお金がいっぱいいるんだよ。僕らはレイチエルたちや親とは違ったルートでお金をためたい。そして、いつかは聖堂美術館を貸しきって収集した作品を、みんなに見せてあげたい。わかるでしょ？お兄さんの絵はいいよ。これからもっと価値があがる」

おい、おい。結局はそこかよ。

キースはちよつと複雑な顔をした。自分の絵を褒めてくれるのは嬉しいが、資金集めのために、俺に絵を描けっていうのか？

ミリーが言った。

「誤解しないで。お金のためだけに、こんな話をしているわけじゃないの。私、大聖堂通りの露店の絵って生き生きしていて、すごく

好き。あの中にだって世に出せば認められる作品は沢山ある。それに画家たちは皆、仲良しで……遠くからいつも見ていたの。あの人たちなら、何か力になってくれるんじゃないかと。だって、私たちはしょせん、子供だもの。誰か大人の手をかりないと絶対、レイチエルたちにはかなわない。ピータバロ・シティ・アカデミアを変えたいの、だから、ここにきて！私たちに力を貸して」

そんな事言われたって……、俺だって、今日、17歳になったばかりなんだぞ。そりゃ、露店の仲間たちはあれでけっこう頼りになるけど。

「そんな話、簡単に“うん”とは言えない。とにかく、俺は家に帰りたんだ」

ミリーや他の生徒たちの視線が、背中に痛い。

「パトラッシュ、俺には関係ない事だよな」

生意気なだけかと思っていたミリーの泣き顔を思い出すと、なんとなく後ろめたい気分がする。キースはパトラッシュに念を押すようにそう言つと、ピータバロ・シティ・アカデミアの正門を後にした。

* * * * *

翌日、キースは聖堂美術館に展示された自分の絵の前に立っていた。

何か変な感じだ。だって、俺の夢はいつか聖堂美術館に自分の絵が飾られて、みんなに認めてもらう事だった……それなのに、夢が実現した今は、それがちつとも嬉しくない。

実際のところ、俺の夢って何だったんだ？金が欲しかったのか、名声か？

わからない……俺は自分で自分の気持ち、さっぱりわからなくなってしまう。

その時だった。

「おい、キース、この風景画、絵画窃盗犯が描いた絵だつて、えらい騒ぎになってるじゃないか」

背後から急にかけられた声に、びくと身をちぢ込ませる。振り返ってみると、見知った大聖堂通りの露店の仲間の一人が、心配顔で立っていた。

「……でも、この絵つて、お前が描いた絵だよな。なあ、一体、何があつたんだ？」

「しっ！！」

キースは慌てて男を黙らせると、まじまじとその顔を眺めた。すると、にわかにはシテイ・アカデミアで聞いたミリーの言葉が頭に浮かんできた。

“……遠くからいつも見ていたの。あの人たちなら、何か力になってくれるんじゃないかと。ピータバロ・シテイ・アカデミアを変えたいの、だから、ここにきて！私たちに力を貸して”

俺がやりたかった事、これからやれる事……それつて

はっと目を見開くと、突然、キースは身をひるがえし、男に言った。

「今は何も聞かないで。でも、後で理由を話したら、俺についてきてくれるか？納得がいっただいいんだ！無理には言わないから」

「え……そりゃ、仲間の頼みなら……でも、一体、何なんだ？」

男がその台詞を言う前に、もうキースは駆け出していた。

「パトラッシュ、急げ！」
くわん、くわんつと鳴きながら、帆走する相棒に声ははずませて言う。

迷いが、霧が晴れるように消えてゆく。

絵の価値もわからない収集家に褒められて、自分の絵が売れたって嬉しいはずがないじゃないか！俺は高値で売るために絵を描きたいんじゃない。絵が好きだ、本当に好きだから、その気持ちをみんなに伝えたかっただけなんだ。

ピーターバロ・シティ・アカデミアを変えるんだ！そして、いつかは聖堂美術館を貸しきって、日の目をみない作品やうずもれた才能を、みんなに見せてあげたい。

息を弾ませ駆けながら、キースは少し人の悪い笑みを浮べた。

でも、ミリーたちはやっぱり子供だ。俺の絵だけで、そんな資金が作れるものか。あの小ずるいレイチエルに対抗するには、きれいな事ばかりを言っただけはいられない。

「お前もついてきてくれるよな。しばらくは、夢も理想も封印するけど、俺は大丈夫だから……」

豪勢な作りのピーターバロ・シティ・アカデミアの校門の前で、キースはパトラッシュの頭をくしゃくしゃとなぜた。

いつかは、夢を現実にする。今はまだ、できないけど……でも、その分は

ピーターバロ

“好きなだけ描けるから。俺のキャンパスの中に”

名前を告げると、門番はレイチエルからその名を聞いていたらしく、すぐにキースのために門を開けてくれた。

「行こう、真実を見つけたら、きっと何かが変わるから！」

そして、これが後に、強欲な美術収集家からは、極悪、そして民衆からは義賊と呼ばれた絵画窃盗団“ピーターバロ”首領、兼、ピータバロ・シテイ・アカデミア総帥の片腕となり、画家にして聖堂美術館館長となる男、“キース・L・ヴァンベルト”が正式にこの学院の門を通り抜けた第一歩だったのだ。

〈完〉

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1868e/>

ピータバロ

2009年3月24日09時29分発行